

ハドリアヌス・ユニウスの『エンブレム集』について

伊藤博明
埼玉大学教養学部教授

エンブレム・ブックの嚆矢と言うべき、アンドレア・アルチャート(アルチャーティ)の『エンブレムの書』(*Emblematum liber*)がアウクスブルクで刊行されたのは1531年であるが、続いて1540年から1560年にかけては、パリおよびリヨンにおいて、エンブレム・ブックが盛んに制作された。その後、エンブレム・ブックの出版の中心となるのは、アントウェルペンの書肆クリストファー・プランタンである。この出版社からは、1561年にパラダンの『英雄的ドゥーズ集』がシメオーニのインプレーサ集と合本されて刊行され、その翌年には同一の書物のラテン語版が刊行されている。アルチャーティの『エンブレムの書』も、1565年から84年までの19年間に計8点が刊行されている。そしてプランタンは、1564年と1565年にエンブレム・ブックの中でも代表的な2つの著作を、すなわち、ヨハネス・サンブクス(1531-84年)の『エンブレム集、および古代のいくつかの貨幣』(*Emblemata, cum aliquot nummis antiqui operis*)と、ハドリアヌス・ユニウス(1511-75年)の『エンブレム集』(*Hadriani Iunii Medici Emblemata*)を刊行した。

ユニウスは、オランダ生まれの人文主義者、詩人、医者であり、イタリア、フランス、イングランドを遍歴したのち、ハールレムのラテン語学校の校長を務めた。彼の『エンブレム集』は、58枚の図版を含んでおり、サンブクス宛の書簡も付されている。各々のエンブレムは、モットーと図像とエピグラムから構成されており、縁飾りがつけられている。エピグラムは四行からなる簡単なものであるが、ユニウスはエンブレムの後に詳しい解説を、エンブレムごとに付している。彼が「読者へ」(p.65)において述べているところでは、エンブレムには少し謎めいたところがあり、その洗練された心地よい曖昧さのゆえに、それに特有の優雅さが生まれる。読者はその意味を見いだすことによって驚きと、そして最後に満足が得られる。それゆえにユニウスは、個々の註釈をエンブレムと切り離してまとめたのである。

『エンブレム集』の典拠は、ほかのエンブレム集と同様に、古代ギリシアやラテンの古典作家が多いが、とくにユニウスにはプルタルコスへの関心が見いだされる。「乙女は純潔を、妻は家を護らなければならない」(*Virginem pudicitiae, matronam domus satagere*)と題されるエンブレム30番では、左側に龍を踏みつけたミネルウァが、右側に亀に足を載せたウェヌスが描かれ、エピグラムでは次のように語られている。

地を這う龍は武器の音をたてるミネルウァに背を向け、
ウェヌスは家運ぶ亀を踏みつける。
先を見通す賢い乙女は自らの評判について気をかけ、
誠実な妻は沈黙して、家の敷居を踏むことはない(p.30)。

この逸話はプルタルコス『イシスとオシリスについて』(*De Iside et Osiride*, 75)に基づいている。

彫刻家ペイディアスは、アテナ像の傍らに蛇を、エリスのアプロディテ像の傍らには亀を置きました。処女たちは護衛が必要だが、結婚した女性は家に引きこもり、口を閉ざしているのがふさわしい、ということを表明しているのです(柳沼重剛訳)。

実際、ユニウスは「解説」において、プルタルコスに言及して、次のように述べている。

プルタルコスは彼のイシスについての巻において、以下のように伝えている。すなわち、最も名高い評判を得ている彫刻家ペイディアスは、足の下に龍を踏みつけているパラスの像をつくり、またエリスの住民のためには、亀の上に立っているウェヌスの像をつくった。それは、最初の像が処女にふさわしく、自己を護衛を表わし、後の像が結婚した女性にふさわしく、沈黙と家財の保護を表わすためである(p.107)。

ユニウスはプルタルコスの記述に、これ以上、道徳的な訓戒を重ねることはせずに、これらの女神の形姿とアトリビュートについて詳しく説明している。最後に彼は、エピグラムで用いた「家運ぶ」(*domiporta*)という表現がキケロに見いだしたことを付言している。

ユニウスはまた、エンブレム第 45 番の「神は破廉恥を嫌う」(*Deum odisse impugentiam*)において、サイスのアテナ神殿の浮彫をめぐるプルタルコスの記述を参照している。エピグラムは次のとおりである。

速い鷹、魚、恐ろしい馬が住んでいる処はない。
どうして、この順序に並んでいるのか。
この図像は、エジプト人の三つの言葉を述べている。
すなわち、神は破廉恥を嫌う(p.51)。

ユニウスは「解説」でプルタルコスの記述を詳しく紹介し、河馬についてはアンミアヌス・マルケヌス、プリニウス、ソリヌスから生物学的な特徴を挙げているが、図像もエピグラムとも、その代わりに馬を描いている。

ユニウスはまた、先行するエンブレム集も参考にしており、たとえばエンブレム第 50 番の「妻の徳」(*Vxoriarum virtutes*)は、ラ・ペリエールの『よき術策の劇場』第 18 番を典拠としている。エピグラムは次のとおりである。

足で亀を押さえつえ、右手で鍵を掴み、

左手は自由で、歯の囲い[口]を覆っている。
妻はうろつき回らないように、無駄に時を過ごさないようにすべきだ。
妻には財産を護ろうとする配慮がふさわしい(p.56)。

ユニウスのエンブレム・ブックは広範な読者を得て、いくども再版されている。1566年、67年、68年、69年、75年、85年、95年、96年と版を重ねた。仏語版は1567年(および68年、70年、75年)に、オランダ語版も1567年(および75年)に刊行されている。こうして、ユニウスの『エンブレム集』は、16世紀後半のヨーロッパにおいて、いわばエンブレム・ブックの「典型」として広範な影響を及ぼし続けたのである。

書誌

【テキスト】

Hadriani Iunii Medici Emblemata ad D. Arnoldum cobelium. Eiuudem Aenigmatum Libellus. Antverpiae [Antwerpen]: Ex officina Christophori Plantini, 1565. 8vo, 149 + (19)pp. Cf. Mario Praz, *Studies in Seventeenth-Century Imagery*, Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 1964, p.384; John Landwehr, *Dutch Emblem Books*, Utrecht: Haentjens Dekker & Gumbert, 1962, 117a; John Landwehr, *Emblem Books in the Low Countries 1554-1949: A Bibliography*, Utrecht: Haentjens Dekker & Gumbert, 1970, 276; John Landwehr, *Emblem and Fable Books Printed in the Low Countries 1542-1813: A Bibliography*, Utrecht: HES Publishers, 1988, 398.

Hadriani Iunii Medici Emblemata. Antverpiae [Antwerpen]: Ex officina Christophori Plantini, 1569. 8vo, 143pp. Cf. Praz, p.385; Landwehr, *Dutch Emblem Books*, 117c; Landwehr, *Emblem Books*, 278; Landwehr, *Emblem and Fable Books*, V, 401.

Hadriani Iunii Medici Emblemata. Antverpiae [Antwerpen]: Ex officina Christophori Plantini, 1575. 16mo, 143p. Cf. Praz, p.385; Landwehr, *Dutch Emblem Books*, 117d; Landwehr, *Emblem Books*, 279; Landwehr, *Emblem and Fable Books*, 402.

[フランス語版]

Les Emblemes du S. Hadrian le Jeune Medecin et Histoiren des Estats de Hollande. Anvers [Antwerpen]: De l'imprimerie de Christophe Plantin, 1567. Cf. Praz, p.385; Landwehr, *Dutch Emblem Books*, 119; Landwehr, *Emblem Books*, 286; Landwehr, *Emblem and Fable Books*, 409.

[オランダ語版]

Emblemata Adriani Iunii medici. Overgeheset in Nederlantsche tale deur M.A.G. Amtwerpen: Ghedruct by Christoffel Plantin, 1567. Cf. Praz, p.385; Anne Gerard Christian de Vries, *De Nederlandsche emblamata*, Amsterdam: Ten Brink / De Vries, 1899, 12; Landwehr, *Dutch Emblem Books*, 118a; Landwehr, *Emblem Books*,

284; Landwehr, *Emblem and Fable Books*, 407.

【研究文献】

Cast, David: “Marten van Heemskerck’s Momus criticizing the Works of Gods: A Problem of Erasmian Iconography,” *Simiolus*, 7 (1974), pp.22-34.

Heesakkers, Chris L.: “Junius (Hadrianus) (1511-1575),” in *Centuriae Latinae. Cent une figures humanistes de la Renaissance aux Lumières offertes à Jacque Chomarot*, Genève: Droz, 1997, pp.449-455.

Heesakkers, Chris L.: “*Hadriani Iunii Medici Emblemata* (1565),” in *Mundus emblematicus. Studies in Neo-Latin Emblem Book*, ed. by Karl A.E. Emenkel and Arnould S.Q. Visser, Turnhout: Brepols, 2003, pp.33-70.

Gordon, Donald J.: “Veritas filia temporis: Hadrianus Junius and Geoffrey Whitney,” *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 3 (1939-40), pp.228-240; in *Idem, The Renaissance Imagination*, ed. by S.Oregel, Berkeley – Los Angeles – London, University of California Press, 1975, pp.220-232.

Semper, Anneliese: *Die Medaillen des Herzogs Heinrich Julius von Braunschweig-Wolfenbüttel und ihre Beziehungen zu dem Emblemata des Joachim Camerairus*, Braunschweig: Stät. Museum, 1955.

Veldman, Ilja M. “Maarten van Heemskerck and Hadrianus Junius: The Relationship between a Painter and a Humanist,” *Simiolus*, 7 (1974), pp.35-54.

付記:本稿は、伊藤博明『綺想の表象学——エンブレムへの招待』(ありな書房、2007年)、および、伊藤博明『エンブレム文献資料集——M・プラーツ『綺想主義研究』日本語版補遺』(ありな書房、1999年)に拠る。